せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一〇七号（一日発行）
平成十年八月一日

年表で読む 古平の歴史

《15》

■古平場所を譲る

百五十年以上にもわたって古平場所を請け負ってきた岡田家が、場所請負制廃止になる前に種田徳之丞らに場所を譲り渡しました。

それは、東蝦夷地の経営が赤字であったこと、そして、利益のあったヲタルナイ場所の請け負いが出来なくなったこと、また、古平場所の運上金が増額になった上、漁も薄くなったことなどがその原因だったことが、願い出た文書から知ることができました。しかし、このことについては種田家関係の文書が残されているので、解読されるともっとくわしいことが分かるのではないかと期待されます。

■丸山下の埋め立て

広谷理助（利助と書いたものもある）らと岡田家から漁場を譲り受けた種田徳之丞は、明治四年、自費をもって丸山下の湿地帯の埋め立てをしました。

これは、海岸一帯に人家が増えてきて、空き地が無くなってきたからです。丸山下を流れていた川を、ほぼ現在の川の位置に掘り割りをし、五百メートル余りの石垣を築いて、約九万五千平方メートルの埋立地をつくったのです。費用は千円を超えたといわれます。

この奉仕事業には種田金十郎が金を出し、徳之丞名義で工事をしたといわれていますが、徳之丞には、開拓使から賞詞と金三十円の手当が下されました。

また、金十郎は徳之丞名義で次のような献金をしています。

「明治十年一月、古平郡内の柳橋を新しく架けるのに金五円七十銭、同じくチルノフ（沖村道路沿い）海岸道路及び蛭子橋修繕に金七円九十銭」

「明治十三年、古平郡小学校建設費として金三十五円」

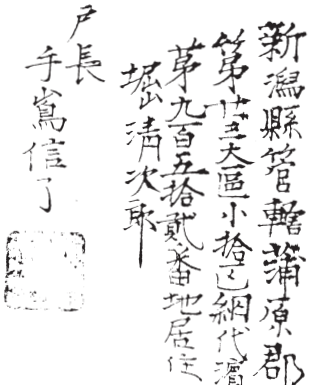
■戸長役場

明治五年九月、札幌に置かれていた開拓使庁を札幌本庁と改め、函館・根室・宗谷・浦河、樺太に五支庁を置くことになりました。石狩国と後志国の岩内・古宇・積丹・美国・古平・余市・忍路・高島・小樽の九郡が札幌本庁の管轄となりました。

四月になると、これまでの庄屋・名主などという江戸時代から続いていた役人（やくにん）が廃止され、新しく戸長・副戸長という制度ができました。

戸長に任命されても、別に事務所もなく、自宅で事務をとっていましたが、その仕事の内容は多方面にわたっていました。いろいろな願いや届けを受け付けて、それを上に差し出す、金銭の貸借や土地、物品類の売買、戸籍に関することから、警察や裁判の立ち会い、教育に関することなど、すべて戸長を経て事務が行われました。戸長などは職業ももっていましたが、役人としての月給は次のようなものでした。

戸長	八円から十円
副戸長	六円から七円
総代	五円



高野名幸作さんの日記から

浜村の世相を思う

【8】

5／28　好天気、呉服屋では見切り物売り出しというので大勢集まり景気がよい、正で家の建前があるというので伊三君が手伝いに行く、父は農園行き、予は店番、このごろの暑さでリンゴ、ナシの花が咲いたとのこと

5／31　今日このごろの農園は早生十四号、リンゴの花盛りで実に見事だ、未明に起きて新鮮な空気を吸って農園行き、精神も爽快ならん、漁夫は昨日あたりからそろそろ帰り始めた、町は寂しくなる

6／2　この日から呉服屋の売り出し、大漁の割りに客足が不足で、予想に反したとのこと、本に行き、客寄せの蓄音機をかける手伝いする

6／8　宵節句とかで芝居がある、大漁ということで小樽、その他からの行商数知れず、銀行、保険会社までも得意先を広めに来る

6／9　旧節句、町内は何となく賑やか、新地の壮士芝居の町廻りが勇ましい、共同干場からはヤグラ太鼓が聞こえ、素人相撲が大人気である

山車が出ない、見せ物がないので実に寂しい、共同干場で女子剣舞と活人形がある、ドンチャンハヤシが店の帳場まで聞こえてくる

7／10　本では祭りの飾りをする、店は見物人でいっぱいである、本年は新地方面が寂しいようだが、浜中は実に何十年ぶりの賑やかさだ、夜になり人出はますます激しく、東京の浅草か大阪の千日前のような有様だ、

7／11　珍しく青空になった町中はちょうちん、万国旗、幕などを飾る、老若男女がみな晴着を着て楽しそうに歩いている、十二時から剣舞、活人形のドンチャンが始まったが急に静かになった、有栖川宮がお亡くなりになり、賑やかなことはつつしむよう伝達があったとのこと、皇族なので止むを得ぬがせっかくの祭りもさびしくなった

7／17　二十人くらいでリンゴ袋掛け、今年は人手が不足でどこも困っている、一人三十五銭から四十銭くらいだ

7／19　この頃ハシカ大流行一家で三、四人もかかったというところもある

7／26　六時頃、新地方面で火事、火元は吉小路の長屋、消防組や手伝いで大混雑、子ども三人が焼死したとか、実に悲惨だ、入舟、新地方面に見舞いに行き七時頃帰る

7／28　猿を連れた豆売りのじいさんが来る、子どもたちが大勢出て賑やかだ

7／30　先帝陛下（明治天皇）の崩御から一年、町内の家々では弔旗を立て、学校では遙拝式が行われた

8／8　イカ漁が五百～六百もあり、道具類が多数売れる

8／15　土谷座では浪花節、お盆なのに相撲大会や盆踊りもない、時勢が変わったのかこれでは四、五年もしたら忘れられてしまうだろう

8／17　蝦夷富士登山会第一日目、九時、発動機船で出発十一時余市着、十二時の汽車で出発、ヒラフ駅に着き、三時半金剛杖を持って登る、参加したのは五人

8／20　イカ大漁で七百～千三百も釣る、

8／26　昨夜からの暴風雨は恐ろしいくらいだ、勇丸が岸に打ち上げられて破損、川崎船も○の浜で破損、朝里駅付近では十五戸が流失し、死者が二十二人、小樽新聞社が義えん金を募集している

9／18　佐渡行きの汽船が出るというので、りんごの荷造りをし新地まで持って行く。今年の本道の稲作は全滅とのこと、今年は一般に作物は悪

⇦（次ページ三段目へ続く）

ふるさとの味を懐かしみ 夏やせを防止

福井幸平

退院後、体調がなかなか戻らず、検査で体中をかき回されたせいか、どうもダイエットがすぎたようで、ただ今の体重五十キロ？　とは情けない！

以前は、天ぷらなど油っこいものが好きであったが、今はからだが受けつけなくなってしまった。それでもがんばって、万歩計だけは欠かさず続けている。

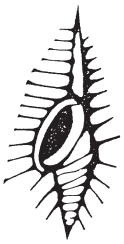
目下、体調の回復に向けて、おかゆに梅干し、鯛みそ（鯛のひとかけらも入っていない）、海苔のつくだ煮、豆腐、ウニの煮たもの、この間、鮎を一匹食べたがうまかった。まぁこんな副食物である。

この暑さなので、ササゲのどっさり入った三平汁、それにすすにしんの焼いた一切れでもあれば、これで腹は満足である。老いてからの体調の調整は、大変な努力が必要であることを痛感させられた。

若者向けの食べ物にはまず関心がない。今はお目にかかれないフキのぶしょう漬（無精漬）、あの長いフキのしょっぱいヤツを、歩きながら口で皮をむき食べた、あの素朴な味が忘れられない。

沖縄の人がサトウキビの固い皮を口でむき、ガリガリ食べるのによく似ているように思う。残念だが、もうフキのぶしょう漬を食べる習慣は戻らないことだろう。

夏やせて
徒歩を短くしてみても



（前ページ下段から続く）

かった

9／25　今日から宝海寺で大遠忌法要のお参りとかで賑やかだ、新地の郷社では招魂祭でその行事もあり、子どもたちが参拝に行く

9／28　昨夜からの暴風でりんごが落ちていないか、父らが見に行ったがさほど落ちていなかったとのこと、今年のりんごは家と㊥が一番上作とのこと、父はりんごを内地送りしたら面白かろうということで、その荷造りをしている

10／1　浜に出るとりんごの積取船が一隻入港していて、荷役中の川崎船が四隻いる

10／2　関口さんの主人が死亡したと聞き驚いた、病気だということも知らなかった、この悲報に万感こもごもだ。演芸会、青年団運動会などでいろいろ世話になった、我々の上に立って何によらず尽力してくれた。朝食前にお悔やみに行きしばらく話して八時ころ帰る

10／5　関口さんのお葬式九時より、会葬者も多く盛儀であった。阿波桃園君が弔辞を読む、夜、忌中引きに行く

10／7　来る二十七日、倶知安で物産共進会があるので、それに出品方を役場からすすめられる。十九号・一号・四十九号など出品するつもりだ

10／11　共進会に出すりんごをもぐのに、朝五時に起き農園へ行く。いざ出品するとなると玉、色、形のみな揃ったよいものはなかなか無いものだ、ようやく一種類宛一箱ずつ五箱を選ぶ。十九号と一号なら負けぬ。観楓会をやるというので、その回章を書く

10／12　共進会へ出品するりんご五箱を役場へ持参する、古平もりんごの名産地になったものだ。町内全部で七十～八十点あった

10／15　ヨシヤチ方面の拓殖道路予定地の視察に行く。七時に出発、参加者は町長、㊥主人、中主人、㊀主人、㊁主人、平田、原田、仲谷勇五郎、午後五時ころ帰る

―以下次号へ続く―

さようなら私の愛車

渡辺ハツエ

夫が他界してから、私の愛用の自転車もお役ご免となって、納屋に収まってから二年が経ちました。

振り返ってみると、亡夫が元気で漁業に従事していたころは、私と一心同体となって家業に協力してくれた、掛け替えのない大切な自転車でした。夫が出漁の朝にはそれぞれ自分の自転車に乗って港へ行き、その日の安全操業を祈って夫を見送ります。

その後、体調をくずして漁師をやめてからは、いろいろと私の用事も多くなりました。そのつど自転車の世話になり、私の行くところ、常に自転車といっしょでした。強い向かい風のときなどには、「気をつけれゃ、無理するなゃ」と、励まされ、自転車と共にがんばってきました。

追い風のときには、私はただサドルに腰かけてハンドルを握っているだけ。まさに、「舟は帆まかせ帆は風まかせ」の心地よさでした。

お墓参りのときなどは夫に留守を頼んで、畑からとった花を自転車のかごに入れて走ります。車が多いと緊張しますが、そうでないときは結構なスピードでペタルをふんでいました。

墓参をすませて早く帰ったりすると夫は、

「早いなぁ、飛ばせで来たんだべ。危ないど、気つけれゃ」

と、ぬくもりのある忠告をしてくれたものでした。

夜、孫たちに書いた手紙は、翌朝の第一便に間にあうようにとひと走り、それを投函して満足していましたが、今はもう自転車に乗る年齢にも限界がきました。自転車で走っているよその奥さんを横目で見ながら、テクテクと歩いております。

亡母が、私が自転車で出掛けると、家へ帰るまで心配してくれていたことを思い出し、母のことをしのんでおります。

◆

さおばかり

竹内コト

小さいころには、店に行ってもよくいろいろな「はかり」がありました。雑貨屋さんでは、さおばかりが多く使われ、しょう油や油、酢などは桝（ます）ではかっていましたし、酒屋さんでは桝のほかに、コップ一杯のもっきり酒がありましたし、米屋さんでは、ひと抱えもある大きな一斗桝もありました。呉服屋さんでは、布地を物差しではかって売っていました。

けれども、私が一番興味のあったのはさおばかりでした。

当時は、一般の商店のほか行商が盛んでしたが、ほとんどが計り売りでしたから、それぞれがさおばかりを持って歩いていました。

私は沢江村でしたから、買い物はいつも川畑さんでした。みんなやさしい人で、買い物をすると、ゆっくりとさおばかりの分銅を動かしてさおの上り下がりを見ながら、「ハイ、おまけです」と、言ってくれます。

りんごは、須藤さんのおじいちゃんが売りに来ていました。りんごを木綿のふろしきに包んで四隅を結んで袋のようにし、さおばかりで計っていました。

⇦（次ページ下段へ続く）

遥かなる故郷の思い出 [47]

『古平弁』の話 ⑥

橘 義我 春

「とうさんは花巻の人ですか」
「おらァ生まれは津軽だ。若げェころに花巻サ、モゴ（むこ）に来たんだ。言葉わるぃベサ」
すかさず私は古平弁で、
「なんも、なんも、おらァ北海道生まれで、とうさんの言うごとみんな解るから、あんすん（安心）して何でもしゃべてけれでァ。そごらあだり走ってるバスもトラックも、みんな俺だぢの会社で作ったもんだ。なんせ、生産量は世界一だべ。残業はなんぼでもあるし、稼げるどぎに働かねば、ゼンコはまわってこネベサ。今はどごの会社も払う日給と待遇は似だりよったりだ。ドンダベ、とうさん、俺の会社サこねェが。俺の職場で、ケガや病気が起きないように、最後までこの俺に面倒見させでケレ」と。

彼に説明している時は気がつかなかったが、いつの間にやら私たちのまわりに求職者が四人も集まっていて、私の説明を聞いていたらしい。私もここぞとばかり古平弁で、
「とうさんダヅも東京サ来たら、仕事が終わったらいっぱい飲みに行くの楽しみでねぇが。会社のハダリに安い飲み屋がズッパリあるし、東京のオナゴはメンコイし、酒ッコもタイシタウメェド」
とやったら、まわりの連中がどっとわいた。

最初に面接した農家のご主人が真っ先に契約を申し出たら、まわりにいた四人のうちの三人がすぐ契約を申し出て、書類に捺印してくれた。

求人活動第一日目で、四人の期間工と契約できたのは大成功であった。五人いた求職者の内私が四人をさらったことになり、他社のベテラン担当者はあっけにとられていた。

職安を出る時に、受付の若い職員にお礼を言ったら自分のことのように喜んでくれ、「人集めの名人ですネ。」と、おだてられ、今までの人集めの不安が一気に吹っ飛んでしまった。

翌日、北上市の職安でまたまた古平弁の独演会で一人採用、次の日も水沢市で一人採用が決まって計六人となった。まだ、一の関市と千厩町が残っていたが、会社の仕事の方も心配なので、予定を変更して早々に切り上げて帰社した。

会社の人事部の方では、行ったと思ったらすぐ帰って来たので心配そうだったが、三日間で六人の採用を決めて帰って来たと知って、採用係はこれにはびっくりしていた。

それからも、会社では慢性的な人手不足が続いた。私はその後もたびたび東北方面へ人集めに出向いたが、古平弁が功を奏し、私の現場では必要な人員が確保できて、仕事に支障をきたすような事態は解消された。

私にとってはまさに古平弁サマサマで、たいしたイガッタ、イガッタ、だった。

（『古平弁の話』終わり）

（前ページより続く）

昔は、一斤（きん）とか百匁（もんめ）、一貫目という単位が使われていました。

家でも、昆布を製品にするときはさおばかりを使っていましたが、漁場では二人でかつぐほどの重いものを計る、大きなさおばかりもありました。

私の家にもあったのですが、不要になったので古道具に売ってしまいました。今あれば文化財にでもなったのに、と残念に思っています。

古平の方言

が、一冊の本（二十四ページ）になりました。一穂記念展の会場に置きますので、ご自由にお持ちください。

古平ホトトギス会

ジェットスキー炎天の海騒がしく　斉藤波留
山車に乗り笛吹く双子親ゆずり　仲谷比呂子
夏休み母の手料理久しぶり　仲谷安代
熱燗の席に夫なき夕餉かな　大和田絵伊
盆の月夫と仰ぎし日の遠く　仲谷美砂
散る花に横一文字木太刀振る　水見句丈
帰り山車疲れの見える笛太鼓　福井幸平
箱根うつぎ源平合戦村祭り　山口悦子
八重桜咲いて今年も留守の庭　大島喜恵
外泊を許され里の祭り見に　山口浪
万緑の芝に球うつ人まばら　長谷川和子
一望館眼下に夏の海ひらけ　斉藤睦子
虎杖の花に囲まれ磯番屋　岩瀬みのる
半農のもぐ暇なきサクランボ　越野敏雄
北海の夕凪となり落日す　越野清治
春潮やこの地にもあり宝島　中村樺宵

名水を引きし麓や若葉風　西島サツ子
鮭の稚魚群なし下る水温む　外山俊久
こいのぼりうろこが金に光ってる　小五水見翔人
つばめのすどろにわらとでつくられた　小一水見玲央
架掛けのすけそ寒干始まれり　越野スミ子

永い間「せたかむい」に作品をお寄せくださいました
越野スミ子さんが、先月、お亡くなりになりました。
遺作の一句をご紹介し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

川柳

ナツメロに若い私が其処に居る　石井愛子
主婦はずし爺もはずして一人旅
集まればボケぬ振りする老いの知恵
亡父母偲び亡夫を慕って老いの日々　渡辺ハツエ
独り居の朝はせわしく食旺盛

古平町岬短歌会七月詠草

忘るなとつぶやく事の日日多し朝飲む薬机の上にあり　長崎フユ

砂浜の舟小屋につばめの巣のありて餌を運ぶ親しきりに飛べり　竹内コト

接ぎ木の花の緋色を交へシャクナゲの元木の白花盛り上り咲く　鈴木時子

磯の香とマリンブルーの水の色に心の霧も久々に晴れつ　田中香苗

海に向く崖一面の黄の花は「えぞきすげ」よと見上げつつ往く　池田テル

堤防の下に芥の散りぼふを隠して花咲くじゃこう葵は　堀典子

裏庭の胡桃の太き切株に茸の数多花咲く如し　菅原節子

アカシアのたはめる枝を引きよせて花房を摘むてんぷらにせん　東美知

同朋の年に一度の酒の宵涙あり又笑ひの絶えず　魚屋友子

庭畑の草引く夕べ「無理すな」と鍬かつぎ帰る友の言ひゆく　奥山きよみ

待ち待ちし雨降る夜あけ近々と蛙鳴き交はす声に目覚めぬ　丹後初江

寝ねもせず祭の重責果しなば街の茶房に珈琲飲まむ　山口スヱ

古平の方言（完）

・よいとまけ＝北洋のカニ漁場で網を揚げる時のかけ声だそうで、土木現場でも使われる
・よーやっと＝ようやく、どうやら
「魚かかってかかってよーやっと網揚げだ」
・よっかがる＝寄りかかる
・よかべ、よがべ＝いいだろう、よかろう
「それぐれェで まぁ よがべ」
・よげぇ＝たくさん、多く、　余計なこと
・よぐしぎ、よくしき＝よくよく、仕方なく
「あっこの嫁さん出で行ったの、よぐしぎのこどでねェが」
・よくたがり＝欲ばり、
「あのババ、エエよくたがりだ」
・よこざ、よござ＝囲炉裏（いろり）で主人の座る場所、上座
・よこねまり＝（特に女の人が）横に足を出して座る、行儀の悪い座り方とされた
・よごみ＝ヨモギ　「ヨゴミ餅」
・よごれる＝（汚れる という意味のほかに、雨などで）ぬれること
・よしかがる、よっかがる＝寄りかかる
・よそづら、そとづら＝外でイイ顔をする、
「あの人 そとづらばっかりエエ」
・よっこする＝物をごまかす、かくしておく
「この魚 よっこしたのだれだ？」
・よっぱら＝十分に、たっぷりと
「ゆンべは よっぱら飲んだ」
・よのめ＝（足の裏にできる）うおの目
・よばる＝呼ぶ、大きな声で叫ぶ
・よばれる＝よその家で何か食べた、（招待されて）ご馳走になる
・よりこ＝産卵した鰊の卵が岸に寄ったもの
・よわってしまう＝困ってしまう
・らくよう＝落葉松、カラマツ
・らんき＝夢中、必死、がむしゃら
「らんき なってやってる」
・らんきたがり＝なおも熱中する
「あの らんきたがり」
・りぎむ、りきむ＝力が入る、怒る
・りごう＝利口、口がいい、口先のうまい人を軽蔑していうことがある
・りんき＝リンゴ
・ルンペンストーブ＝よく使われた石炭用のストーブ
・ろーか（廊下）、ろーが＝鰊を一時入れておく建物
・わやだ＝めちゃくちゃだ、どうしようもない
「浜見でも ごみでわやだ」
・ンだ、ンだンだ＝そうだ、そうだそうだ

（古平の方言　―終わり―）

あとがき

▼吉田一穂は古平をふるさと呼んで、この地を、旧友をこよなく愛し懐かしみ、その詩の発想の地ともいわれております。この度、一穂生誕百年を記念して、文化会館前に『白鳥古丹』碑を建てることになり、十三日、除幕式が行われます。
▼十三日から二十日まで、会館二階で一穂記念展も開かれます。ぜひお出でください。
▼富山市に在住の高橋藤藏さんから原稿が届きましたが、編集の後でしたので次号にします。
▼高野名幸作さんの日記の原文を見たいという声がありますので、次号でまた載せることにします。
▼積丹国道が開通する、昭和三十三年まで運航されていた定期船について知りたい、という希望がありますが、資料がまとまっていません。写真や資料ありましたらお貸しください。
▼戦前の写真をお持ちでしたらお貸しください。